

## 母親の攻撃性と児童が認知する母親の養育態度との関係

中田尚吾\*・菅原正和\*\*

(2005年1月15日受理)

Shogo NAKATA, Masakazu SUGAWARA

### The Relationship between a Mother's Aggressiveness and the Child's Cognition of the Mother's Attitude towards Bringing up the Child

#### I 問題と目的

従来、親の養育態度に関する研究方法には、主に2つの異なる方向性がある。1つは、親の養育態度がどのようにして子どもの自我形成に影響を与えるかを検討する研究である。他の1つは、親の養育態度に影響を与える要因をつぶさに探求し検討する研究である。子どもの自我発達のメカニズムを明らかにしようとする発達心理学的立場に立つならば、より社会経済的要因とも関わりを持つ複雑な後者の方法よりも、どのような養育態度が子どもの自我発達に影響を及ぼすのかという前者の立場で十分なのかもしれない。しかし、どのような母親の養育態度が子どもの発達に影響を及ぼすのかという点だけでは、親の表面的な関わり方のみが焦点化され、親の personality 特性には触れられないことは否めない。本研究は、子どもの発達に大きな影響を及ぼす親の養育態度を規定する要因にまで踏み込んで研究する必要があると考える後者の立場に立って研究を進めている。本論文は子どもの自我発達に大きな影響を与えていると考えられる母親の養育態度に焦点を絞って検討した。

母親の養育態度に影響を与える要因については、いくつかの注目すべき先行研究がある。例えば、遠藤ら(1991)は、Belsky(1984)の「親の養育行動の規定因に関する process model (「子どもの特徴」「仕事」「夫婦関係」「親の社会的交友関係」「パーソナリティ」「親自身の生育歴」が母親の養育態度に影響を及ぼすというモデル理論)に基づき、母親の養育行動と「母親の生育過程に関する変数」「妊娠・出産に関する変数」「家族構成と結婚年数」「育児環境に潜在するストレスやサポートに関する変数」「子ども自身の特徴や健康状態などに関わる変数」との関係性を初産婦・経産婦ごとに検討し、経産婦の方が先述の変数との関係が強いことを明らかにしている。また森下・泉本(1982)は、母親の対人関係と養育態度との関係を検討し、一般的に extrovert で友人への信頼の高い母親程、子どもに対して温かい態度を示していることを明らかにしている。さらに戸田(1999)は、母親の養育態度と家族、夫婦の関係を検討し、統制度が高く温かさにおいて高得点を示す母親(統制:高, 反応/温かさ:高)は、家族を調和のとれた理想的家族として見ており、夫婦関係もお互いに援助的であるとしている。このように先行研究において、母親の養育態度に与える要因がいくつか検討されてはいるが、本研究では、その中で特に母親の personality の視点から検討する。Belsky(1984)の process model に

\*岩手大学教育学研究科 \*\*岩手大学教育学部

において、「子どもの特徴」を除いた「仕事」「夫婦関係」「親の社会的交友関係」「親自身の生育歴」の要因は、「パーソナリティ」を媒介して養育態度に影響を与えているとされている。つまり、Belsky (1984) process model に従うならば、母親の養育態度を規定する数々の要因の中で「パーソナリティ」が主要因であると考えられているのである。しかし、もともと一般的 personality の理論においては、単独で固定的な personality の存在は不可能であることは言うまでもないが、同一の家庭環境のもとでの兄弟／姉妹のみならず、一卵性双生児間でさえ physical な類似性に比して personality の大きな相違は良く知られている。母親の personality 特性と養育態度との関係を調べている研究は予想外に少なく、本研究では先行研究で示された多要因の中で、最も母親の養育態度と関連が深いと思われる母親の personality 特性と養育態度との関係について検討する。そして、多くの personality factor の中でも、「攻撃性」という factor に絞って親の養育態度との関係を検討する。その理由は次の通りである。

親の子どもに対する養育行動の中で、子どもの自我発達にとって最も深刻な悪影響を及ぼすと考えられている行動は「虐待」である。津崎 (2000) は児童相談所における臨床経験から、児童虐待に対する行動の変容を求められる保護者の特徴として、他者からの関わりに対して拒否的・攻撃的な態度があることを指摘している。更に先行研究においては、母親の「敵意」や「短気」といった攻撃性の下位的構造が児童虐待に影響を与えることが指摘されている (例えば、Lesnik-Oberstein et al., 1995; 中嶋, 2000; Mammen et al., 2002)。それ故、望ましくない母親の養育態度に最も強い影響を及ぼすと考えられる、親の personality 特性として攻撃性を分析することは、重要な意味を持つと思われる。

森下ら (1982) は、子どもの性格と親の養育態度との関係を3つの視点、すなわち「親自身が認知する養育態度」「子どもが認知する養育態度」「親と子どもの養育態度に対する認知差」から検討し、「子どもが認知する養育態度」が最も子どもの性格と関係があることを明らかにしている。また村井 (2002) は、子どもの問題行動は、母親自身の現実の育児態度ではなく、あくまでも「子どもから見た親の態度」と関係しているとしている。つまりこれらの研究は、子どもの発達と母親の養育態度との関係を考慮する際に大切な点は、子どもが認知する母親の養育態度を評定するのが適切であることを示唆している。従って本研究では、母親の養育態度の評定者を子どもが行っている点特徴的である。また、予防的な観点からすると母親の養育態度が子どもに及ぼす影響が大きい、出来るだけ低年齢の子どもを対象に研究を行う必要があるが、本調査では質問紙による対人評定 (person perception) が可能になるといわれる小学校4～6年生を対象に、児童から見た母親の養育態度を評定 (rating) してもらった。

以上、本研究では、小学校4～6年生とその母親を対象とし、母親の攻撃性と児童が認知する母親の養育態度との関係を主として分析している。

## II 方 法

**調査対象** 岩手県内の公立小学校6校の4学年から6学年までの51学級の児童1,635名とその保護者が調査対象であった。

**調査時期** 2003年2月下旬に実施した。

**測定方法** 「児童の認知する母親の養育態度」の測定には、「田研式・親子診断テスト (児童用・生徒用)」(品川・品川, 1958) の100項目のうち、小口 (1991) が選定した18項目を使用した。本尺度は、小口 (1991) によって一般的に望ましくないとされる養育態度「厳格・拒否」「過保護・期

待」の2因子構造になることが確認されている。回答は、それぞれの項目に対して「よくあてはまる」「あまりあてはまらない」「ややあてはまる」「まったくあてはまらない」のいずれかを選択する4件法で求められた。

「母親の攻撃性」の測定には、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（安藤ら，1999）を使用。本尺度は、行動の「身体的攻撃」「言語的攻撃」、感情の「短気」、認知の「敵意」という4因子構造になることが確認されている。回答は、それぞれの項目に対して「非常によくあてはまる」「だいたいあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の内からいずれかを選択する5件法で求められた。なお、攻撃性を回答する際に防衛が生じることが予想されるため、質問項目の合間にダミー項目を含めた（具体的には、「人が困っているとき、その人を助けてあげようとする」「物事を人並みに、うまくやれる」等）。なお、家庭によっては母親が回答不可能の場合も考えられたので、母親が回答したのかどうかを判別するために、質問紙の冒頭に子どもとの関係について回答を求める項目を入れた。

手 続 き 調査依頼にあたって、調査校の校長から調査の承諾を得た後、質問紙を調査対象の学校の担当教諭に届け、内容や実施手順を説明して調査した。調査実施の際、調査用紙配布前に対象児童に対して、「このアンケートは、学校の成績とは関係ないこと」「このアンケートの結果は、友達や担任の先生は見ないこと」「このアンケートは、提出したくない人は出さなくてもよいこと」を説明してもらい、その後担任を通して、児童に児童用・保護者用の調査用紙と回答後の用紙を密封するための封筒を配布し、記入は学校ではなく各家庭で行った。回答用紙の回収は、児童を通して担任が行った。

### Ⅲ 結 果

欠席および記入漏れや記入ミス、回答が偏っている調査用紙は、分析対象から除外した。また、本研究は母親の攻撃性とその児童の認知する母親の養育態度との関係を検討することが目的であるため、保護者用の質問紙に母親以外の保護者が記入しているものも分析から除外した。その結果、児童が回答した質問紙とその母親が回答した質問紙がともに揃ったものは972組となった（有効回答率59.4%）。その内訳は、4年生342名（男子180名、女子162名）、5年生332名（男子160名、女子、172名）、6年生297名（男子148名、女子149名）とその母親972名であった。

以後の分析は全てこの972組、計1,944名分のデータを用いて行った。

#### (1) 各尺度の因子分析

本研究に使用した2つの尺度に対し、先行研究と同様の因子構造になるかを確認するために探索的因子分析を施した。

始めに「母親の攻撃性」を測定するために用いた日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（安藤ら，1999）に因子分析（主因子法、プロマックス回転、4因子解）を施した。なお分析は、ダミー項目を除いてから行った。その結果、先行研究における「短気」「敵意」「言語的攻撃」「身体的攻撃」と解釈される因子が抽出された（表1）。若干因子負荷量が低い項目が見られたが（「でしゃばる人がいても、たしなめることができない（-.32）」）、先行研究において、この項目を含めた因子得点で妥当性が得られていることより、本研究ではそのまま用いることとした。Cronbach の  $\alpha$  係数は、.64～.75 とまずまずの内的整合性を示した。

表1 母親の攻撃性尺度の因子分析結果

質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4
・かっとなることを抑えるのが難しいときがある	0.72	0.01	-0.05	-0.08
・いらいらしていると、すぐ顔に出る	0.65	-0.06	0.06	-0.06
・ばかにされると、すぐ頭に血が上る	0.61	0.02	-0.06	0.08
・ちょっとした言い合いでも、声が大きくなる	0.59	-0.07	0.16	-0.02
・たいした理由もなくかっとなることがある	0.48	0.16	-0.14	0.03
・友人の中には、私のことをかげであれこれ 言っている人がいるかもしれない	-0.05	0.73	0.15	0.00
・私を嫌っている人は結構いると思う	-0.01	0.70	0.01	-0.03
・かげで人から笑われているように思うことがある	0.20	0.55	-0.13	-0.18
・嫌いな人に出会うことが多い	0.01	0.42	0.02	0.13
・人からばかにされたり、 いじわるされたと感じたことはほとんどない	-0.01	-0.40	0.01	0.06
・私を苦しめようと思っている人はいない	0.13	-0.39	-0.02	-0.02
・友達の意見に賛成できないときは、はっきり言う	-0.06	0.08	0.68	-0.09
・自分の意見は遠慮しないで主張する	0.00	0.02	0.64	0.03
・だれかに不愉快なことをされたら、 不愉快だとはっきり言う	0.09	-0.02	0.59	-0.06
・意見が対立したときは、議論しないと気がすまない	0.27	-0.05	0.39	-0.08
・でしゃばる人がいても、たしなめることができない	0.29	-0.07	-0.32	-0.16
・なぐられたら、なぐり返すと思う	0.09	-0.07	0.09	0.68
・権利を守るためには暴力もやむをえないと思う	-0.02	0.04	-0.11	0.51
・挑発されたら、相手をなぐりたくなるかもしれない	0.29	-0.03	0.04	0.52
・相手が先に手をだしたとしても、やりかえさない	0.04	0.12	-0.02	-0.49
・どんな場合でも、 暴力に正当な理由があるとは思えない	0.25	-0.06	0.13	-0.44
・人をなぐりたいという気持ちになることがある	0.17	0.28	0.01	0.38

因子1：短気 因子2：敵意 因子3：言語的攻撃 因子4：身体的攻撃

次に「児童の認知する母親の養育態度」を測定するために用いた「田研式・親子診断テスト（児童用・生徒用）」（品川・品川，1958）のうち、小口（1991）が選定した18項目に因子分析を施した（主因子法，バリマックス回転，2因子解）。その結果，先行研究における「厳格・拒否」「過保護・期待」と解釈できる因子が抽出された（表2）。先行研究と比べて，各因子における項目数は減少しているが，因子を構成する項目自体は先行研究とほぼ同じであるため，本研究の結果に基づいて因子を用いることにした。Crobachの $\alpha$ 係数は，.69～.60と若干低い値を示したが，先行研究とほぼ同様の項目で因子が構成されているということもあり，概ね問題はないと思われる。

## (2) 因子ごとの得点の性差と学年差

因子ごとの得点の性差と学年差について検討した。ただし，「母親の攻撃性」の因子得点においては，性差，学年差を検討していない。その理由は本研究の場合，児童の性別，学年といった属性によって「母親の攻撃性」の因子得点に差異が見られるかどうかを検討することに格別の意味が存在しないと思われたからである。それ故，「母親の攻撃性」の因子に関しては，得点のみを記載した（表3）。

表2 児童が認知する母親の養育態度尺度の因子分析結果

質問項目	因子1	因子2
・あなたが話しかけても「いそがしいからね」と言っ て、相手になってくれませんか。	0.56	-0.11
・あまりあなたに相談しないで、いろんなことを決め てしまいますか。	0.55	-0.07
・あなたのたのみや、約束を、よく忘れてたり、聞いて くれなかつたりしますか。”	0.51	-0.07
・外出先とか、人の前では、あなたに対するたいどが、 家にいるときと違いますか。	0.50	0.01
・言われた通りにしなかつたら、ひどくしかられます	0.50	0.08
・あなたは、しょっちゅう、ごごとを言われますか。	0.43	0.04
・あなたの友だちのことを、やかましく言いますか。	0.43	0.19
・あなたが、たのめば、どんなに大変なことでも、喜 んでしてくれますか。	-0.01	0.62
・少しのけがや、病気でも、とても心配して、手当て をしてくれますか。	-0.07	0.55
・あなたを立派な人にするために、どんなことでもし ようとしていますか。	-0.05	0.50
・あなたのきげんをとったり、ちやほやしたりするほ うですか。	0.25	0.45
固有値	1.81	1.20
寄与率 (%)	16.41	10.89

因子1：「厳格・拒否」 因子2：「過保護・期待」

表3 母親の攻撃性因子得点の平均値および標準偏差

母親の攻撃性 n=972	短気	敵意	言語的攻撃	身体的攻撃
	15.94	16.10	15.26	15.47
	(3.60)	(3.54)	(2.89)	(4.02)

( ) 内は標準偏差

「児童の認知する母親の養育態度」の因子得点ごとの性差と学年差について検討した。各因子得点ごとに(性)×(学年)の2要因分散分析を行った。その結果、「厳格・拒否」因子において性差と学年差の主効果が、そして「期待・過保護」因子得点においては学年差の主効果が認められた(表4)。そこで、両因子において単純主効果を求めた(TukeyのHSD法)。その結果、「厳格・拒否」因子得点においては、男子の方が女子に比べて有意に高く(p<.001)、4年生の方が6年生に比べて有意に高かった(p<.05)。「過保護・期待」因子得点においては、4年生の方が6年生に比べて有意に高かった(p<.01)。「厳格・拒否」因子得点における女子よりも男子の方が高いという結果は、母親は男子の方をより厳しく育てるという三宅・藤田(1995)の指摘を支持するものである。

以上、性別や学年によって「児童の認知する母親の養育態度」得点に差があることが明らかとなった。具体的には、男子は女子よりも「厳格・拒否」得点が高いこと、また、4年生は6年生よりも「厳格・拒否」得点、「過保護・期待」得点が高いことが明らかになった。

表4 児童が認知する母親の養育態度因子得点の平均値、学年差、性差

n = 972	4年男子	4年女子	5年男子	5年女子	6年男子	6年女子	学年差	性差	交互作用
	180名	162名	160名	172名	148名	149名	F値	F値	F値
厳格・拒否	16.47 (3.93)	15.31 (3.67)	15.49 (3.95)	15.11 (3.85)	15.64 (3.66)	14.52 (4.17)	3.80*	12.63***	1.04 n.s.
過保護・期待	9.81 (2.60)	9.94 (2.44)	9.58 (2.35)	9.42 (2.29)	9.21 (2.26)	9.15 (2.42)	6.62**	.03 n.s.	.31 n.s.

( ) 内は標準偏差

\*\*\*: p &lt; .001, \*\*: p &lt; .01, \*: p &lt; .05

## (3) 母親の攻撃性と児童が認知する母親の養育態度との関係

母親の攻撃性と児童が認知する母親の養育態度との関係について調べるため、先ず母親の攻撃性の因子得点をもとに、攻撃性の高い群、中間群、低い群の3つの群に母親を分類(攻撃性の各因子得点の平均値から1/2標準偏差範囲内の得点の母親を中間群(M群)とし、M群よりも得点の高い母親を高群(H群)、M群よりも得点の低い母親を低群(L群)に分けた)した。

(2)においては「児童の認知する母親の養育態度」得点に性差が認められており、また先行研究においても親と子の変数の関係が子どもの性別ごとに異なることが多く指摘されているので、分析は男女別に行った。

男女別に、「母親の攻撃性」因子得点のそれぞれの群を独立変数とし、その児童の認知する母親の養育態度「厳格・拒否」「過保護・期待」得点をそれぞれ従属変数とする1要因分散分析を行った。その結果、男子において、母親の「短気」と「厳格・拒否」との間に、女子において、母親の「敵意」と「過保護・期待」との間に有意なF値が得られた。そこで、TukeyのHSD法による多重比較を行った。その結果、男子において、母親の「短気」H群はL群よりも「厳格・拒否」得点が高く、女子において、母親の「敵意」H群はL群よりも「過保護・期待」得点が高くなることが明らかとなった。即ち、男子に対しては母親自身の認知する「短気」は「厳格・拒否」的な養育態度として現われること、しかし他方女子に対しては母親自身の認知する「敵意」は「過保護・期待」的な養育態度として現われることが示された。かかる分析結果の詳細は、表5～表12の通りであった。

表5 母親の「短気」得点HML群ごとの「児童の認知する母親の養育態度」得点と分散分析および多重比較結果(男子)

母親の「短気」 n = 488	H群 144名	M群 170名	L群 174名	F値 (2, 485)	多重比較 (5%水準)
厳格・拒否	16.63 (3.99)	15.86 (3.93)	15.33 (3.63)	4.46*	H > L
期待・過保護	9.74 (2.52)	9.48 (2.39)	9.46 (2.38)	.65 n.s.	

( ) 内は標準偏差

\*: p &lt; .05

表6 母親の「敵意」得点HML群ごとの「児童の認知する母親の養育態度」得点と分散分析および多重比較結果(男子)

母親の「敵意」 n = 488	H群 175名	M群 174名	L群 139名	F値 (2, 485)	多重比較 (5%水準)
厳格・拒否	16.28 (3.67)	15.99 (3.99)	15.30 (3.93)	2.61 n.s.	
期待・過保護	9.47 (2.34)	9.75 (2.27)	9.40 (2.70)	.93 n.s.	

( ) 内は標準偏差

表7 母親の「言語的攻撃」得点HML群ごとの「児童の認知する母親の養育態度」得点と分散分析および多重比較結果(男子)

母親の「言語的攻撃」 n=488	H群 161名	M群 191名	L群 136名	F値 (2,485)	多重比較 (5%水準)
厳格・拒否	15.81 (4.41)	15.88 (3.64)	16.02 (3.51)	.11 n.s.	
期待・過保護	9.74 (2.44)	9.55 (2.38)	9.32 (2.47)	1.08 n.s.	

( ) 内は標準偏差

表8 母親の「身体的攻撃」得点HML群ごとの「児童の認知する母親の養育態度」得点と分散分析および多重比較結果(男子)

母親の「身体的攻撃」 n=488	H群 155名	M群 185名	L群 148名	F値 (2,485)	多重比較 (5%水準)
厳格・拒否	16.16 (3.92)	16.02 (3.79)	15.47 (3.92)	1.34 n.s.	
期待・過保護	9.55 (2.40)	9.68 (2.51)	9.38 (2.35)	.64 n.s.	

( ) 内は標準偏差

表9 母親の「短気」得点HML群ごとの「児童の認知する母親の養育態度」得点と分散分析および多重比較結果(女子)

母親の「短気」 n=483	H群 173名	M群 149名	L群 161名	F値 (2,480)	多重比較 (5%水準)
厳格・拒否	15.24 (3.48)	15.09 (3.99)	14.65 (4.23)	1.03 n.s.	
期待・過保護	9.75 (2.39)	9.58 (2.49)	9.20 (2.29)	2.26 n.s.	

( ) 内は標準偏差

表10 母親の「敵意」得点HML群ごとの「児童の認知する母親の養育態度」得点と分散分析および多重比較結果(女子)

母親の「敵意」 n=483	H群 153名	M群 170名	L群 160名	F値 (2,480)	多重比較 (5%水準)
厳格・拒否	15.57 (3.78)	14.56 (3.84)	14.91 (4.04)	2.77 n.s.	
期待・過保護	9.94 (2.52)	9.38 (2.21)	9.24 (2.43)	3.77*	H > L

( ) 内は標準偏差

\*: p < .05

表11 母親の「言語的攻撃」得点HML群ごとの「児童の認知する母親の養育態度」得点と分散分析および多重比較結果(女子)

母親の「言語的攻撃」 n=483	H群 163名	M群 205名	L群 115名	F値 (2,480)	多重比較 (5%水準)
厳格・拒否	15.26 (4.16)	14.70 (3.57)	15.14 (4.08)	1.04 n.s.	
期待・過保護	9.69 (2.23)	9.36 (2.51)	9.53 (2.42)	.85 n.s.	

( ) 内は標準偏差

表12 母親の「身体的攻撃」得点HML群ごとの「児童の認知する母親の養育態度」得点と分散分析および多重比較結果(女子)

母親の「身体的攻撃」 n=483	H群 142名	M群 188名	L群 153名	F値 (2,480)	多重比較 (5%水準)
厳格・拒否	15.51 (3.70)	14.72 (4.12)	14.86 (3.78)	1.83 n.s.	
期待・過保護	9.74 (2.48)	9.51 (2.33)	9.31 (2.40)	1.20 n.s.	

( ) 内は標準偏差

## IV 考 察

母親の攻撃性は児童の認知する母親の養育態度に影響を与えており、男子においては母親自身の認知する「短気」が、児童の認知する母親の養育態度「厳格・拒否」に影響を与え、他方女子においては母親自身の認知する「敵意」が児童の認知する母親の養育態度「過保護・期待」に影響を与えていることが明らかとなった。

次に、男子女子共に母親の攻撃性H群L群とM群との間に心理統計上有意な関係は認められていないが、表5と表10の各因子得点を見ると、L群、M群、H群の順に得点が増えている。母親の攻撃性が児童の認知する母親の養育態度に影響を与えていることを踏まえ、以下の考察を加える。

始めに男子において母親自身の認知する「短気」が児童の認知する母親の養育態度「厳格・拒否」に影響を与えていることについて考察する。これは、母親の気の短さは、母親が意図する・しないに関わらず、男子に対して厳しい養育態度を形成しやすいことを意味していると考えられる。しかしこのような関連は、母親と男子との間でのみ見られ女子の間では見られない。その理由としては2つのことが仮定される。第一は子どもの性差である。例えば、先行研究において、男子は女子と比較して一般的に望ましくないとされる攻撃行動がどの年齢においても一貫して高いことが報告されている(Buss & Perry, 1992; 山崎ら, 2001; 畠山・山崎, 2002)。男子は女子よりも客観的に望ましくない行動を取る頻度が高いため、母親の気の短さを刺激し、「厳格・拒否」のような厳しい養育態度を受け度合いが高くなっている可能性がある。二つ目の理由は、母親自身の子どもの性別によるしつけの差異が影響しているかもしれない。渡辺(1995)は、親の子どもに対するしつけが、子どもの性別によって異なる傾向は、特に日本において強いことを報告している。母親の気の短さは、子どもを養育をする際、性別ごとに異なった形で表出されていると考えられる。本解析結果からは、母親の「短気」と女子の認知する母親の「厳格・拒否」的な養育態度との間に心理統計上、有意な関係は見出されていない。しかし、乳幼児期ほどではないにしても児童期において、母親の気の短さが、男子には影響を与え、女子には影響を与えないということは考えにくく、子どもの認知する母親の養育態度に与える影響については、今後も深く検討する必要がある。

次に女子において母親自身の認知する「敵意」が児童の認知する母親の養育態度「過保護・期待」に影響を与えていることについて考察する。母親の「敵意」は、先行研究においては児童虐待の要因になり得ることが指摘されている(例えば、Lesnik-Oberstein et al., 1995; Mammen et al., 2002)。これらの研究においては、一般的に母親の「敵意」は子どもに対する厳しい関わり方に繋がることを示唆している。ところが本研究の示す母親の「敵意」が、「厳格・拒否」な養育態度ではなく「過保護・期待」的な養育態度を強めているという結果は、児童虐待の知見と照らし合わせてみると明らかに矛盾している。その理由には、次のような内的過程の存在が予測される。

敵意とは、他者に対する否定的な信念・態度のことを指す。即ち、敵意は他者に対する不信感と近接した概念であり、他者に対する不信感、比較的長期間に渡る発達過程において形成され、一過性に形成されるものではない。天貝(2001)は、高校生における信頼感の発達に影響を及ぼしている要因を検討し、対人的な傷つき体験が大きく影響していることを明らかにしている。天貝の研究は、高校生を対象として行われているが、対人的傷つき体験が他者に対する否定的な信念・態度を強め、いずれの対象にも般化し易い。母親の敵意は、対人的な傷つき体験を中心とした過去のnegativeな体験の蓄積により形成されたものであるかも知れない。対人関係におけるnegativeな体験の基に形成される母親の敵意は、女子に対しては、過保護な養育態度に影響を与え得る。この点に関して山中(2002)



は、「親の方に処理されていない憎しみの感情などがあり、それを相殺する形での、つまり反動形成としての甘やかしもありうる」ことを指摘している。即ち、本研究の分析結果と山中の臨床経験を通しての解釈を総合すると、母親の「敵意」が反動形成 (reaction formation) としての「期待・過保護」的な養育態度として表出する傾向は、対男子に対してよりも、対女子において強くなる可能性があると考えられる。

母親と女子児童との関係は、同性の親子関係であり、母親の「敵意」の強さは、自分の子どもの性別を「女性」と認知する際に、何らかの想起された思いが過保護的養育態度に影響を与えているのかも知れない。母親の「敵意」が女子の認知する母親の「過保護・期待」的な養育態度に与える影響については、今後もっと深く検討していく必要があると思われる。

## V 結 び

本研究における解析結果は、男子に対しての母親の「短気」は、厳しい養育態度として向かうこと、他方女子に対しての母親の「敵意」は過保護的な養育態度として向う可能性が強いことを示した。また、母親自身の認知する攻撃性と児童の認知する母親の養育態度との関係を検討した結果、母親自身の認知する攻撃性の変容が子どもの視点から見る母親の養育態度を変容させる可能性を示した。

今後の課題：1) 取り扱った2つの変数、「母親の攻撃性」と「児童の認知する母親の養育態度」は、子どもの他の行動にも影響を与えられるので、児童の攻撃性のような personality factor に与える影響の強度についても検討する必要がある。2) 本研究の分散分析結果から得られた F 値は、必ずしも大きい値ではなく、分析上は母親の攻撃性が児童の認知する母親の養育態度への影響力が然程強くはないことを示している。先行研究においては、母親の「敵意」や「短気」が児童虐待を引き起こす要因になることが指摘されている (例えば, Lesnik-Oberstein et al., 1995; 中嶋, 2001; Mammen et al., 2002) が、本研究での影響力の低さは、方法論的問題から生じているのか、それとも実際の影響力の低さからくるものなのか、質問紙法とは異なった研究方法で再検討し、さらに詳細に見ていく必要がある。

## 引 用 文 献

- 1) 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子 (1999) 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, 70, 384 - 392.
- 2) 天貝由美子 (2001) 信頼感の発達心理学—思春期から老年期にいたるまで— 新曜社  
Buss, A. H. & Perry, M. 1992 The Aggression Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 452-459.
- 3) Belsky, J., Rovine, M., and Tylor, D. (1984) The Pennsylvania infant and family development project : III. The origins of individual differences in infant-mother attachment : Maternal and infant contributions. *Child Development*, 55, 718-728.
- 4) 遠藤利彦・江上由美子・鈴木さゆり (1991) 母親の養育意識・養育行動の規定因に関する探索的研究 東京大学教育学部紀要, 31, 131-152.
- 5) 畠山美穂・山崎 晃 (2002) 自由遊び場面における幼児の攻撃行動の観察研究：攻撃のタイプと性・仲間グループ内地位との関連 発達心理学研究, 13, 252 - 260.

- 6) Lesnik-Oberstein, M., Koers, A. J. & Cohen, L. (1995) Parental hostility and its sources in psychologically abusive mothers : A test of the three-factor theory. *Child Abuse Neglect*,19,33-49.
- 7) Mammen, O. K., Kolko, D. J. & Pilkonis, P. A. (2002) Negative affect and parental aggression in child physical abuse. *Child Abuse & Neglect*,26,407-424.
- 8) 三宅健二・藤田尚文 (1995) 両親の発達観と子どもの親子関係認知 高知大学教育学部研究報告, 48, 5-19.
- 9) 森下正康・泉本道子 (1982) 3歳児の母親の対人態度と養育態度 和歌山大学教育学部紀要, 31, 43-55.
- 10) 村井則子 (2002) 母親の心理学-母親の個性・感情・態度- 東北大学出版会
- 11) 中嶋みどり (2000) 児童虐待の世代間伝達に及ぼす心理学的要因の検討 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 111.
- 12) 小口孝司 (1991) 母親の自己開示と養育態度が子どもの自己開示と学級集団の適応に及ぼす影響 社会心理学研究, 6, 175-183.
- 13) 品川不二郎・品川孝子 (1958) 親子関係診断テストの手引き 日本文化科学社
- 14) 戸田須恵子 (1999) 母親の養育態度に影響を及ぼす家族, 夫婦関係に関する研究 北海道教育大学紀要, 50, 17-29.
- 15) 津崎哲郎 (2000) 児童相談所の実務から-援助のポイントをめぐっての諸問題. 松原康雄・山本保: 児童虐待-その援助と法制度- エディケーション 31-44.
- 16) 山中康裕 (2002) 甘やかす親の心理と行動 児童心理2002年3月号 甘やかす親 金子書房 1-9.
- 17) 山崎勝之・坂井明子・曾我祥子・大芦 治・島井哲志・大竹恵子 (2001) 小学生用攻撃性質問紙 (HAQ-C) の下位尺度の再構成と攻撃性概念の構築 鳴門教育大学研究紀要, 16, 1-10.